

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第12号

平成27年6月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

朱舜水、楠正行像賛を読み解く

「朱舜水全集・稲葉君山編」「安東省菴三忠傳」「舜水先生文集・水戸本」

稲葉君山編の朱舜水・楠正行像賛に会い、木下英明氏（元茨城県立歴史館主席研究員）のご助言を得て三忠傳、水戸本にも触れることができました。

ここに、それぞれの原本から扇谷が転載した楠正行像賛を掲載します。木下英明氏のご指摘通り、三つの文には異動があることが分かります。

楠正行像賛

●朱舜水全集 稲葉君山編 東京文會堂書店

明治四十五年四月十七日発行

朱舜水先生文集卷之十七

門人 権中納言従三位西山源光圀 輯

男権中納言従三位 綱條 校

楠正行像賛

禮曰。君父之仇。不興共戴天。齊襄復九世之讐。春秋大之。設呂小報大。弱復疆。益又難矣。豫讓不能得志於襄子。申胥所下呂藉手於闔閭。公乃能建義旗。攻鳴鼓。卷甲倍道。潜師入都。使所報者身踰垣而逃。弟穴地而竄。陷刃於其妻。亦足下呂落姦雄之膽矣。斯無媿於枕戈之志。可下呂下報其父臨歿數言。是父是子。雖青年賣志。芳名至今。詩曰。人生自古誰無死。留取丹心照汗青。其然其然。

(2015.3.16 国立国会図書館関西館にて原本より複写・転載)

●国立公文書館内閣文庫本

柳川文化資料集成第二集 安東省菴集影印編 I

三忠傳卷之下 後學安東守約省菴謹撰

貞享元年（一六八四）甲子三月吉辰

雒陽書肆柳枝軒雕刻 楠正成公世子正行公附

正行公'贊曰

禮曰君父之仇不興共戴天齊襄復九世之讐春秋大之設呂小報大弱復疆益又難矣豫讓不能得志於襄子申胥所下呂藉手於闔閭公乃能建義旗攻鳴鼓卷甲倍道潜師入都使所報者身踰垣而逃弟穴地而竄陷刃於其妻亦足下呂落姦雄之膽矣斯無媿於枕戈之志可下呂下報其父臨歿數言是父是子雖青年賣志芳名至今詩曰人生自古誰無死留取丹心照汗青其然其然

(2015.4.20 安東省菴集影印編 I より転載)

●舜水先生文集 京兆書舖柳枝軒 正徳五年（一七一五）

舜水先生文集卷之十七

門人 権中納言従三位西山源光圀 輯

男権中納言従三位 綱條 校

楠正行像'賛

禮曰君父之仇不興共戴天齊襄復九世之讐春秋大之設呂小報大弱復疆益又難矣豫讓不能得志於襄子申胥所下呂藉手於闔閭公乃能建義旗攻鳴鼓卷甲倍道潜師入都使所報者身踰垣而逃弟穴地而竄陷刃於其妻亦足下呂落姦雄之膽矣斯無媿於枕戈之志可下呂下報其父臨歿數言是父是子雖青年賣志芳名至今

ル_レ今。=詩_一曰。人_レ生_レ古_レ誰_カ無_シ死。留_一取_シ丹_一心
ヲ_一照_ス汗_一青。ヲ_一其_レ然_リ其_レ然_リ。リ

(2015. 5. 11 関西大学総合図書館にて原本より複写・転載)

次に、木下英明氏にご教示いただいた楠正行像賛の「釈文」と「注記」を掲載します。

釈文 木下英明

礼に曰く、君父の仇、共に天をいただくにあづからずと。
齊の襄、九世の讐を復す。春秋これを大とす。
もし小をもって大に報い、弱にして彊にむくいるは、
ますます又難し。豫讓の志を襄子に得る能わず、申胥
の闔閭において藉手するゆえなり。
公はすなわち能く義旗を建て、鳴鼓をおさめる。甲を巻
いて道を倍にし、師を潜めて都に入る。
報ゆる所の者は、身垣をこえて逃げ、弟は地に穴しても
ぐり逃れ、刃をして其の妻におかせしめる。亦もって姦
雄のきもを落すに足るなり。これ枕戈の志にはづ
る無く、以下其の父の臨歿の数言に報ゆる可く、是の
父にして、是の子なり。青年志を費するといえども、芳
名は今に至る。詩に曰く、人生古より誰か死無からん。
丹心を留取して、汗青を照らす。其れ然り其れ然り。

注記 木下英明

礼は礼記
齊は周代の諸侯の一つ。
襄は齊の襄公。
九世の讐を復すは、九代以前の仇を討つ。
春秋は孔子の著わした魯国の歴史書。
豫讓は戦国時代の晋の人で、主君の知(智)伯が趙の襄
子に滅ぼされてしまう。
豫讓は体に漆を塗って厲となり、炭を呑んで啞となって
襄子を刺さんと謀るも襄子のために獲られて自殺する。
申胥は申包胥で、春秋時代の楚の人。呉の王の闔閭(盧)
の侵攻に対して、申胥は秦の助けを得て破った。
鳴鼓はつづみを打ちならすこと。転じて罪をならして責
めたる。
巻甲はよろいをしまう。
倍道は昼夜いそぐ、二日路を一日で行く。
潜師は兵をひそかに、こっそりと移動させる。
報ゆる所の者は足利高氏。
弟は足利直義。
竄はもぐり、のがれる。

其の妻は高氏の妻。

枕戈の志はほこを枕にすること。心を軍国に存して安眠
しない。

費は齎で、齎志は死後まで志をもちつづけること。

詩は詩経。

留取丹心、照汗青は、忠誠の誉れが書物の上のこること。
と。

最後に、木下英明氏ご教示いただいた内容をもとに扇
谷が試みた「略解」を掲載します。朱舜水の楠正行像賛
が一人でも多くの人に知られることを切に願いつつ。

略解

礼記に曰く、王や父である人の仇とは同じ天のもとに
命ながらえず、と。かつて、齊の襄公は紀の国を滅ぼし、
九世前の復讐を成し遂げた偉大な人物と、孔子はその歴
史書、春秋の中でこれを褒めたたえた。

しかし、小国が大国に仕返しをするのはもちろん、勢
力の弱いものが強いものに仕返しをすることは極めて難
しい。戦国時代の晋の豫讓は、主君の仇を討とうと体に
漆を塗ってすさまじい姿になり、炭を呑んでおしとなっ
て襄子を刺そうと諮ったが捕えられの身となり自殺し
た。だから、春秋時代の楚の申包胥は、呉の王闔閭の侵
攻に対して秦の助けを得て破ったのである。

正行公は義を貫き、仇を討つという旗を高々と掲げ、
尊氏の罪を挙げて責めたてた。

鎧をしまい、昼夜いそぎ二日路を一日で走り、兵をひ
そかに移動させ都に入った。しかし、尊氏は自ら垣根を
乗り越えて逃げ、足利直義は地に穴を掘ってもぐり逃れ、
尊氏の妻は自刃に及んだ。悪知恵にたけた尊氏らの肝を
冷やしたことは間違いない。

正行公は矛を枕にして安眠せず常に武器を身から離さ
ず、片時も国の事や父母の仇を忘れず、強い義の志を持
ち続けて生き、正成公が桜井の駅で遺訓として残した言
に報いる生き方をした。

偉大な正成公あって、偉大な正行公が生まれたのであ
る。

正行公は、四條畷の合戦で討死をすることで、死後も
帝そして父の仇を取るという志、義を示した。その名声
は、今も多くの人が知る。

詩経にもうたわれている。人間生まれたからにはみな
な死にいくものである。どうせ死ぬのなら、至誠忠義の
心をしっかりと世に残し、長く歴史に輝かしたいものだ
と。

これはまさに正行公の事を云っているのである。

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)